

第二類否定疑問文「ナイカ」「ノデハナイカ」に関する考察

西 嶋 千 恵・白 川 博 之

A Study of the Second Type of the Negative Question -naika and -nodewanaika

Chie NISHIJIMA, Hiroyuki SHIRAKAWA

1. はじめに

否定疑問文の代表的な研究に田野村(1988)がある。田野村(1988)は「デハナイカ」で終わる形式を、構文・音調・意味の観点から3種類に分類し、その中で、原則として上昇イントネーションを持ち、推定を表現する次のようなものを「第二類否定疑問文」として規定した。

(1) (不審な様子から)

どうもあの男犯人じゃないか?

(田野村 1988 : 17 下線は引用者)

この第二類否定疑問文が用言に接続する場合、「用言+ないか」と「用言+のではないか」の異なる二つの形式が見受けられる(以下「ナイカ」「ノデハナイカ」とする)。このことを指摘し、第二類内の二つの形式を区別する研究もなされている(安達(1999)宮崎(2004)ほか)。

(2) (隣を歩いている友達が辛そうなのを見て)

足が痛くないか/痛いんじゃないか? (作例)

この「ナイカ」「ノデハナイカ」は同じ第二類に属しながらも、常に交替可能というわけではない。

また、「ナイカ」は勧誘や依頼といった用法を持ち、「ノデハナイカ」も情報提供機能を持つことが安達(1999)によって指摘されているなど、それぞれに固有の用法も持っている。

(3) あの店のケーキ、{おいしくないか/#おいしいんじゃないか? (作例)}

(4) あら、お急ぎに{なるんじゃないか/#ならない? (宮崎 2001 : 17改)}

(5) ちょっと手伝ってくれない?

(田野村 1990 : 173 下線は引用者)

(6) A 「山田さん、来ますかね?」

B 「さあ、彼の事だから来ないんじゃないか?」

A 「そうですか。じゃあ、電話しないとけいな」 (安達 1999 : 79)

(5)は依頼表現であり、(6)は情報を受け取ったことを示す「そうですか」が続くことからわかるように、情報提供として機能する場合である。どちらもそれぞれに固有の用法であり、「ナイカ」と「ノデハナイカ」を入れ替えることはできない。

以上のことから、両者は形式だけではなく、意味の面でも異なっていることがわかる。

それにもかかわらず、これまでの研究では、第二類否定疑問文と他の形式との比較は多くなされているものの、第二類内の「ナイカ」「ノデハナイカ」を比較し、それぞれの意味機能について考察した研究は多くはない。

しかし、「ナイカ」「ノデハナイカ」についてそれぞれの基本的な意味機能を考察することは、第二類と他形式を比較してきた従来の研究の発展や、否定疑問文の類間の関連性を考察する一助になると考えられる。

そこで、本稿では「ナイカ」「ノデハナイカ」の類似点、相違点に注目し、それぞれがどのような意味機能を持っているかについて考察することを目的とする。

2. 先行研究と問題の所在

「ナイカ」「ノデハナイカ」に関する研究は多くあるが、両者を比較した研究はあまり見当たらない。そこで、まず、両者の基本的意味について扱った先行研究を取り上げ、その検討を通して両者を比較する上での手がかりを探ることとする。

2.1 「ナイカ」について

まず、「ナイカ」の先行研究から検討する。「ナイカ」はその「肯定命題+ナイカ」という形式から、同形式を持つ第三類否定疑問文¹⁾(「否定命題+カ」)、または肯定疑問文と比較され論じられることが多

い。その中から、「ナイカ」の基本的意味について述べた張（2009）と松井（1996）を取り上げる。

まず、張（2009）は、「否定疑問文は「pであるという肯定的な仮説」を作り上げて、その仮説の成否を尋ねるものである。一方、肯定疑問文は、命題の真偽が不明であるために、命題の真偽そのものを直接尋ねるものである」（p.34）と説明している。

また、このように第二類否定疑問文が「pであるという肯定的な仮説」を作り上げていることは、判断を伴う副詞「たしか」「どうも」が共起できることや、命題内容に欠落があることを示す「どこ」「何」といった疑問詞が共起しないということからも確かめることができるとしている。

- (7) この間、街でばったり会ったよね。たしか君は
そのとき誰かと一緒にいませんでしたか?
/＃イマシタカ? (p.223)
- (8) 昨日、どこへ行きましたか?/*昨日、どこへ
行きませんでしたか? (p.222改)

次に、松井（1996）は、第二類否定疑問文には次の二つの知識状況（の知覚）が関与していると説明している。

- (9) 一次知識状況 (α)
Pを蓋然性が高い関連性の命題として選択する（推論を方向付ける独自のルールを持った）知識状況
- (10) 二次知識状況 (β)
一次知識状況に基づいてなされたPの蓋然性判断の妥当性を評価する自己言及的側面をもち、Pに対するいわゆる命題態度の表明に関与する

松井（1996）は、第三類否定疑問文は α 内でPと \sim Pのどちらが事実が決まらないことを示すだけなのに対し、第二類否定疑問文は当該命題Pについての蓋然性判断だけでなくその判断自体の妥当性についても言及するものであるとしている。その意味構成の違いは次のようにまとめられる。

- (11) 第三類
本当に、鯨は魚に属さないか？
[α あなたはく鯨は魚に属さない>と言う]
が、私は知らない

- (12) 第二類
何か飲まないか？
[β [α 私はくあなたは何か飲む>と思っているが] そうではない可能性もある]

このように、先行研究では、「ナイカ」に当該命題Pにおける話者の判断や仮説が存在することが述べられており、命題そのものではなく、話者の考えを質問の対象とすると説明されている。

この点に関しては他の先行研究でも同様の捉え方がなされていると考えられる。

2.2 「ノデハナイカ」について

「ノデハナイカ」は主に疑いの表現「だろう」や「だろうか」との比較がなされてきた²⁾。その中から宮崎（2001）と藤城（2007）を取り上げたい。

宮崎（2001）は「ノデハナイカ」を「だろうか」と共に疑い（命題成立の可能性について思考を巡らす態度）の形式として捉えている。その中で「だろうか」を選択候補としての可能性を取り上げるとし、「ノデハナイカ」を話し手が主体的に一つの可能性を選択していると説明している。このように、選択された可能性を示す「ノデハナイカ」は相矛盾する命題を同時に提示できない。

- (13) 彼は外出しているのだろうか。 あるいは寝ているのだろうか。 (p.18)
- (14) *彼は外出しているのではないか。 あるいは寝ているのではないか。 (p.18)

また、宮崎（2001）は「ノデハナイカ」について、疑いを基本的機能とするが、「話し手の<疑い>を聞き手に差し向けることによって、聞き手にも、それについて考えることを要求するという、間接的な<問い掛け性>も認められる」（p.23）と説明している。

藤城（2007）は「ノデハナイカ」の意味機能を「表現者自身の暫定的な事実判断を明示しつつ、その判断の正当性を再検討の対象にすることを表す」（p.28）としている。

しかし、「疑い」を基本的機能とする宮崎（2001）とは異なり、藤城（2007）は「ノデハナイカ」には「疑い」と「問い掛け」の両方があるという立場をとっている。その上で、どちらのニュアンスが強く現れるかは、「ノデハナイカ」が現れるテキストタイプや、

「ノデハナイカ」が伴う助動詞、終助詞、待遇性、イントネーションなど、様々な要素が互いに関連し合う中で決まってくると説明している。

2.3 問題の所在

「ナイカ」と「ノデハナイカ」の両研究を概観すると、「話者の判断を持ち、それを質問の対象にする」という点において、両者の説明が非常に類似していることがわかる。さらに、「ナイカ」「ノデハナイカ」の基本的意味を考察する根拠となっている (7) (8) (14) において、「ナイカ」と「ノデハナイカ」を交替して論じることは可能であると考えられる。

(7) たしか君はそのとき誰かと一緒にいたのではありませんか？

(8) *昨日、どこへ行ったのではありませんか？

(14) *彼は外出していないか。あるいは寝ていないか。

以上のことから「ノデハナイカ」と「ナイカ」が、それぞれ別の形式との比較の中で研究が進められており、両者の基本的な性質を比較する研究があまり行われていないということがわかる。

確かに、両者は否定疑問文の分類では同じ第二類に属しており、その基本的意味には多くの類似点が見られるだろう。しかし、それにも関わらず、(3) ~ (6) で挙げたように、交替不可能な場合や、類似した基本的意味からは説明することができない固有の用法が存在することも事実であり、両者の相違点に関しても考察する必要があると考えられる。

以上を踏まえ、本稿では「ナイカ」と「ノデハナイカ」の比較を通して、それぞれの基本的意味の考察を試みる。また、その基本的意味をもとに、両者の固有の用法や、交代不可の場合についても考察していく。

3. 基本的意味の考察

3.1 命題選択

先行研究の概観から、「ナイカ」「ノデハナイカ」の意味には「話者の仮説や判断」の存在が大きく関係しており、その妥当性について相手に何う形であることがわかる。また、「ナイカ」「ノデハナイカ」が、補充疑問文や選択疑問文としては用いられないことから、命題Pの選択に関しては不確定ではなく、

話者は既に何らかの判断を持っているように考えられる。

そのため、本稿では松井 (1996) を参考に、第二類否定疑問文を「自分はPと思っているが、そうではない可能性があるため、相手に尋ねる」疑問文として、暫定的に次のように記述することとする。

(15) [[α 私は<P>と思っている]がその判断は妥当か]

しかし、全ての例が (15) のように解釈できるわけではない。例えば、松井 (1996) は第二類否定疑問文が持つ (16) の解釈の意味構成を (17) のように説明している

- (16) a. 何か飲まないか？ (誘い)
b. 犯人は谷村じゃないか？ (推定)
c. この仕事手伝ってくれないか？ (依頼)
d. 傷跡が残らないでしょうか？ (危惧)
(松井 1996 : 499改)

- (17) a. [β [α 私は<あなたは何か飲む>と思っている]が、そうではない可能性もある]
b. [β [α 私は<犯人は谷村だ>と思っている]が、そうではない可能性もある]
c. [β [α 私は<あなたは手伝ってくれる>と思っている]が、そうではない可能性もある]
d. [β [α 私は<傷跡が残る>と思っている]が、そうではない可能性もある] (同上)

(17) は、先行研究で示された「話者の判断を持ち、それを質問の対象にする」ものであると考えられる。しかし、(松井の説明では β で「そうではない可能性もある」としながらも)「依頼」「勧誘」時に既に<何か飲む><手伝ってくれる>という判断がついていることになり、「依頼」「勧誘」の適切な解釈と言えるのか疑問が感じられる。

このことは「依頼」「勧誘」といった特殊な用法だけでなく、次のような例でも考えられる。

(18) (テストだというのに消しゴムを忘れて)
だれか消しゴム二つ持ってないか？ (作例)

(18) も発話の時点で、話者が<だれか消しゴム

を二つ持っている>という判断を持っているとは考えにくい。また、(18)は張(2009)で挙げられたような副詞「たしか」「どうも」とは共起しにくいと考えられる。

(18') #たしか、だれか消しゴム二つ持っていないか？

もちろん(16)(18)の例は、補充疑問文や選択疑問文にすることはできず、ある基準において命題Pを選択していると考えられる。しかし、「だれか消しゴムを二つ持っているだろう」という話者の判断ではなく、むしろ「だれか消しゴムを二つ持っているとうれしい」という話者の期待を表すのではないかと考えられる。同様に(16)も話者の判断を表しているのではなさそうである。

- (16') a. [α私は<あなたは何か飲む>と望ましいと思う/(一緒に飲むことを望んでいる)]
c. [α私は<あなたが手伝ってくれる>とうれしい(ことを望んでいる)]
d. [α私は<傷跡が残る>と困る]

(18'') [α私は<だれか消しゴム二つ持っている>とうれしい]

このように「ナイカ」の命題選択は仮説や判断といった認識的なものだけではなく、期待や危惧といった情意的なものもあるのではないかと考えられる。

(16)や(18)のような例において観察される、既に話者によって判断がなされているという解釈は、むしろ「ノデハナイカ」の場合にあてはまるものではないと考えられる。また、「ノデハナイカ」であれば「たしか」等との共起も自然に感じられる。

- (19) a. (たしか) 何か飲むんじゃないか？
[[α私は<あなたは何か飲む>と思っている]がその判断は妥当か]
c. (たしか) この仕事手伝ってくれるんじゃないか？
[[α私は<あなたは手伝ってくれる>と思っている]がその判断は妥当か]
d. (どうも) 傷跡が残るんじゃないか？
[[α私は<傷跡が残る>と思っている]がその判断は妥当か]

- (20) (たしか) だれか消しゴム二つ持っているんじゃないか？
[[α私は<だれか消しゴム二つ持っている>と思っている]が、その判断は妥当か]

以上のことより、仮説の設定や判断といった先行研究の説明は「ノデハナイカ」にはあてはまるが、「ナイカ」の場合再考の余地があると考えられる。(16)(18)に見られるように、「ナイカ」の命題選択において、今までは認識的に選択する場合が主に取り上げられてきたが、情意的に選択する場合についても考えるべきではないだろうか³⁾。

このような命題選択におけるバイアスを「傾き」とし、次のように規定する。

(21) 傾き

- a) 疑問文の命題選択時に中立な立場ではなく何らかのバイアスがかかること。
b) 相手の様子から話者がPだろうという見込みを持っている場合(認識的な傾き)と、Pであることを{望む/危惧する/…}⁴⁾という気持ちを持っている場合(情意的な傾き)がある。

以上のことを踏まえ、「ナイカ」には認識的な傾きだけでなく、情意的な傾きを持つ場合があるという立場に立って考察を深めていくこととする。

3.2 質問内容

3.1で考察したように、「ナイカ」の場合、情意的な傾きから命題Pを選択する可能性がある。

話者が認識的な傾きによって命題Pを選択するのであれば、「～だろう」という話者の判断や仮説を取り上げるため、話者は他の可能性よりP成立の可能性の方が高いと判断している。

一方、情意的な傾きによって選択される場合は、話者の期待や危惧など、話者にとって重要な関心事を取り上げるため、他の可能性とP成立の可能性の関係は特に問題としておらず、逆にP成立の可能性の方が低い場合もある。

このように情意的な傾きによって命題が選択されたものは、一次知識状況αにおいてP/～Pの判断がついていないと考えられる。

(18) (テストだというのに消しゴムを忘れて)
だれか消しゴム二つ持ってないか? (再掲)

(18) は話者には「 α <だれか消しゴム二つもっている>ことを望む」という期待はあるが、命題の成立不成立については判断がついていない。このような「ナイカ」は「話者の判断や仮説」を持っておらず、そのため、その妥当性判断を相手に求めているとは考えにくい。この「ナイカ」は妥当性判断ではなく、命題Pの成立不成立の判断がついておらず、その判断を相手に求めているのではないかと考えられる。

以上のことは「ナイカ」が常に問かけ性条件を満たす必要があることから説明できる。

(22) (日本兵を探していて)
おい、日本兵を見なかったか?
[[α 私は<あなたが日本兵を見ている>と望ましいと思う]] が、そうか (張 2009: 230改)

(23) A: C君遅いね
B: #もしかすると、電車に乗り遅れなかったか?
[[α 私は<Cは電車に乗り遅れた>ことを危惧している]] が、そうか (作例)

(22) は聞き手自身の経験について尋ねているのに対して、(23) は第三者のことについて尋ねている。そのため、(23) は聞き手が応答可能な存在ではなく、問かけ性条件を満たさない⁵⁾。

また、このことは、「ナイカ」が認識的な傾きを持っている場合にもあてはまる。

(24) #もしかして犯人は山に隠れないか?
[[α 私は<犯人は山に隠れる>と思っている]] が、そうか
(25) #明日はいいことがおこらないか?
[[α 私は<明日はいいことがおこる>と思っている]] が、そうか]

(24) (25) は聞き手には応答不可能であり、「ナイカ」を用いることができない。このことから、いかなる場合においても「ナイカ」は問かけ性条件を満たす場合しか用いることができず、「ナイカ」が命題の成立不成立を相手に問かける疑問文であることがわかる。

一方、「ノデハナイカ」は(24) (25) のような場合でも用いることができる。

(24) もしかして犯人は山に隠れるんじゃないか?
(25) 明日はいいことがおこるんじゃないか?

「ノデハナイカ」は、話者が一次知識状況 α においてP成立の判断がついており、その判断の妥当性の判断を相手に求めている。そのため、相手が直接知り得ないようなことでも話者の判断として示し、妥当性を問うことができると考えられる。

以上のことをまとめると、次のようになる。

(26) 「ノデハナイカ」
[[α 私は< >と思っている]] が、その判断は妥当か] 自身の判断の妥当性を相手に問かけられるものであり、問かけ性条件を満たさない場合でも用いることができる

(27) 「ナイカ」
[[α 私は< >と思っている]] が、そうか
[[α 私は< >と{望んでいる・困る…}] が、そうか] 命題の成立不成立を相手に問かけられるものであり、問かけ性条件を満たす場合しか用いることができない

このような「ナイカ」「ノデハナイカ」の傾きの違いや、質問内容の違いは、次のような意味合いの違いを生じさせる。

(28) (遭難中、真っ暗な山小屋を見つけ、中に向かって)
「誰か{いないか? / #いるんじゃないか?}」 (作例)

(28) は「ナイカ」の場合は「誰がいる」ことについての判断がついておらず、「いる」か「いない」かを問かけているのに対し、「ノデハナイカ」の場合は既に「誰がいる」という判断がついており、中に向かってその判断の妥当性を問かけているため不自然であると感じられる。

(29) (AとBと一緒に歩いているのを見たと言うCに)
「昨日は模試があったから、そこで{#会わな

かったか？ / 会ったんじゃないか？}」(作例)

(29) は A と B の個人情報について問いかけており、C は応答することができない。そのため「ナイカ」で命題の成立不成立を尋ねることは不自然になると考えられる。

また、認識的な傾きを持ち、聞き手が応答可能なことについて尋ねる場合、「ノデハナイカ」「ナイカ」のニュアンスは近くなると考えられる

(30) 私宛の荷物が届かなかった(か)？

[[α私はく荷物が届いた>と思っている]が
そうか] (作例)

(30') 私宛の荷物が届いたんじゃない(か)？

[[α私はく荷物が届いた>と思っている]が
その判断は妥当か] (作例)

4. 周辺事象に関する考察

前節では「ナイカ」「ノデハナイカ」の基本的意味を考察した。それを踏まえて、先行研究で指摘されている「外部世界との関わり」と「情報提供機能」についても簡単ながら触れておきたい。

4.1 外部世界⁶⁾との関わり

「ナイカ」は外部世界との間にギャップがある場合に、文脈から一旦排除されたPの可能性を再導入し真偽を明らかにする機能を持ち(井上 1994)、一方「ノデハナイカ」の使用には、外部世界は関係しない(宮崎 2004)。

(31) A 「明日は晴れるだろうね」

B 「え？午後からかなり降らないか」

B' 「え？午後からかなり降るんじゃないか？」

(32) A 「明日は雨だろうね」

B 「ああ、午後からかなり降らないか」

B' 「ああ、午後からかなり降るんじゃないか？」

(31) (32) とともに宮崎 2004 : 11改)

(31) ではAが「降る」という可能性を排除しているため、相手のBは「ノデハナイカ」だけでなく「ナイカ」を用いることもできる。しかし、(32) のようにAが「降る」という可能性を認めている場合は、Bは「ナイカ」を用いることはできない。

このように「ナイカ」が外部世界とのギャップを

問題とするのは何故かという疑問については、「ナイカ」が命題の成立不成立を問う疑問文であるということから説明できると考える。

(33) あの人が何か落とさなかったか？ (作例)

(33) は認識的な傾きを持つ「ナイカ」であり、その意味構成は [[α私はくあの人が何か落とした>と思っている] が、そうか] であると考えられる。この時、[α私はくあの人が何か落とした>と思っている] という見込みを持ちながら、何故<p>の真偽について問題にするのかについて、外部世界とのギャップが大きくかかわっていると考える。

話者は最初P(あの人は何か落とした)と思っ
ているが、外部世界から~Pの可能性も導入され、P/
~Pの判断がつかなくなったと考えられる。そのため相手にPの成立・不成立について判断を仰ぐ必要性が生じ、「ナイカ」が用いられたのである(図1)。

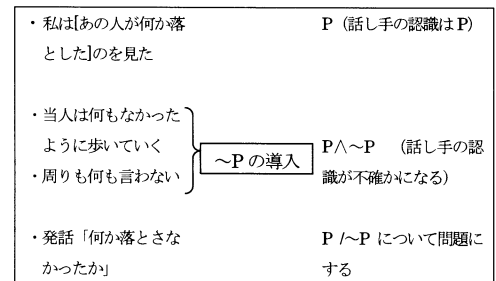


図1 「ナイカ」発話と外部世界との関わり

一方「ノデハナイカ」は自身の判断の妥当性を問う疑問文であるため、ギャップがなくても用いることができる。

また、次のような情動的な「ナイカ」はそもそもPの成立が不確かであるため、外部世界とのギャップがない場合でも用いられると考えられる。

(34) (頭をぶつけて)

「こぶにならない(か)？」

[α私はくこぶになる>ことを危惧している]

(作例)

(34) は誰かの「こぶにならない」という発話によって「こぶになる」可能性が排除されたわけでも、状況から「こぶにならない」という推論がなされたわけでもない。そもそも命題Pの成立が不確かである

ために、命題の成立不成立を問う「ナイカ」が用いられたと考えられる。

このように「ナイカ」が外部世界とのギャップを必要とするのは、「ナイカ」は命題の成立不成立について相手に問いかける疑問文であるため、「認識的な傾き」を持ち一旦なされた判断が、外界とのギャップにより再びP/~Pの判断がつかない状態になる必要があるためであると考えられる。

4.2 情報提供機能

情報提供文とは情報を聞き手に与える機能を持つもので、主に平叙文がそれを担う。一方、情報要求文とは聞き手から情報を引き出そうとする機能を持つもので主に疑問文がそれを担う。しかし、安達(1999)は「ノデハナイカ」が情報要求文のほか、情報提供文として機能する場合もあるとして、次の例文を挙げている。

- (6) A 「山田さん、来ますかね？」
B 「さあ、彼の事だから来ないんじゃないか？」
A 「そうですか。じゃあ、電話しないといけない」 (再掲)

3節で考察したように、「ノデハナイカ」の意味構成は[[α 私は<P>と思っている]が、その判断は妥当か]であり、自身の判断を述べ、その妥当性について判断を求める疑問文である。この時、[α]という自身の判断を述べることに焦点がある場合、情報提供文への移行するのではないかと考えられる。

また、安達(1999)は、情報提供文の条件として i 応答文として使用、ii 思考動詞の補文への生起、iii モダリティ副詞(主に「たぶん」との共起を挙げており、「ノデハナイカ」がすべてを満たすのに対し、「ナイカ」は思考動詞の補文になりにくく、「たぶん」との共起の容認性も低いと述べている。しかし、安達(1999)でも指摘されているように、「情意的な傾き」を持つ「ナイカ」は思考動詞の補文になり得る。このことが、「ノデハナイカ」の情報提供機能への移行のように、話者の期待・危惧を表明することに重きを置き、依頼・勧誘など固有の表現につながるのではないかと考えられるが、これについてはさらなる考察が必要である⁷⁾。

5. まとめ

本稿では、第二類否定疑問文内の「ナイカ」「ノデハナイカ」について比較し、次のような基本的意味を考察した。

「ナイカ」は先行研究で言われている「認識的な傾き」のほか、「情意的な傾き」を持ち、命題の成立不成立を相手に問う疑問文である。そのため、問いかけ性条件を常に満たす必要がある。

一方「ノデハナイカ」は「認識的な傾き」を持ち、話者の判断の妥当性を相手に問う疑問文である。そのため、問いかけ性条件を満たさない場合でも用いることができる。

両者の意味構成は次のようになっている。

- (27) 「ノデハナイカ」
[[α 私は< >と思っている]が、その判断は妥当か]
(28) 「ナイカ」
[[α 私は< >と思っている]が、そうか]
[[α 私は< >と{望んでいる・困る…}]が、そうか]

6. 今後の課題

以上、「ナイカ」と「ノデハナイカ」を比較し、その基本的意味の考察を行った。先行研究では、「第二類否定疑問文」を扱いながら、どちらか片方しか言及していなかったり、同じような意味として説明しているものが散見されたが、本稿の考察が、さらなる研究の発展の端緒となれば幸いである。

今回の考察では、「ナイカ」「ノデハナイカ」の基本的意味の違いを明らかにすることを目的とした。その結果として「ナイカ」が「命題の成立不成立についての判断を持たず、相手に問いかける疑問文」であるということが明らかとなったが、これは、今まで肯定疑問文の特徴として説明されてきたものに近く⁸⁾、否定疑問文「ナイカ」を疑問文全体で位置づける上で重要な手掛かりになると思われる。今後、「情意的な傾き」について考察を深めるためにも、否定疑問文だけに留まらず、疑問文全体を視野に入れて考察する必要がある。

また、第三類否定疑問文「否定命題+カ」は形の上でも「ナイカ」と似通っており、両者が連続する例も挙げられる。

- (35) (修理を依頼する前に確認すべき事柄として)
ご家庭のヒューズやブレーカーが切れていま
せんか？ (田野村 1991:7改)

第三類否定疑問文と第二類否定疑問文の連続性を示唆する研究はいくつか挙げられるが、本稿で考察した「ナイカ」の基本的意味からも両者の連続性が示唆される。これについてもさらなる考察が必要であると考える。

注

- 1) 田野村(1988)は「ない」が否定辞本来の働きを持っている否定疑問文を「第三類」としている。
(1は素数ではないことを教えられて)
そうか、1は素数じゃないか。(田野村 1988)
(1が素数デナイト君ハ言ウガ得心デキナイ)
本当に1は素数じゃないか？ (同上)
- 2) 本稿は「ナイカ」との比較を目的とするため、「問い掛け」として働く「ノデハナイカ」を主に扱う。しかし、どちらが主にせよ「ノデハナイカ」に「疑い」の機能があることは「ナイカ」との比較の上で大いに参考になると思われる。
- 3) 認識的な傾きと情意的な傾きは、はっきりと弁別できるわけではない。本稿は「ナイカ」に認識的な傾きだけでなく、情意的な傾きも認めるべきだという立場に立つ。
- 4) 「情意的な傾き」とは「望む」「危惧する」だけではなく、「話者にとって重要な関心事全般」を取り上げるため、このように表記している。
また、命題Pに対して「期待」を表すか「危惧」を表すかは文脈に依存し、同じ命題でも文脈によって表す意味が異なる場合がある。
- 5) 第三者のことであっても、聞き手の知識にあるものや、すぐに確認可能であることには「ナイカ」を用いることができる。
- 6) 井上(1994:224)では外界の状況や先行文脈における話の流れといった、「発話場面における話し手の認識や信念以外の世界」を仮に「外部世界」と呼ぶとしている。
- 7) 宮崎(2001:27)は次のような例文を挙げて、「ノデハナイカ」を用いると、本来、聞き手に決

定権があることに対して話し手が意見しているような意味」になると述べている。

「作家協会の、ちょっとしたパーティがあるんだ。君を連れて行きたい、*いいんじゃない？」(p.26)これは「ノデハナイカ」が話し手の判断を導入する形式であることも関係しているのではないかと考えられる。

- 8) 「ナイカ」は[α]を持っており、それを導入するという働きがある点で肯定疑問文と異なっていると考えられるが、さらなる考察が必要である。

参考文献

- 安達太郎(1999)『日本語研究叢書11 日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- 井上優(1994)「いわゆる非分析的な否定疑問文をめぐって」『国立国語研究書報告107研究報告15』国立国語研究所, pp.207-249
- 田野村忠温(1988)「否定疑問文小考」『国語学』152集, pp.16-30
- 田野村忠温(1990)『現代日本語の文法I』和泉書院, pp.155-177
- 田野村忠温(1991)「疑問文における肯定と否定」『国語学』164集, pp.1-14.
- 張雅智(2009)「現代日本語における疑問文の「傾き」—肯定・否定疑問文の機能を通して—」『文化』第72巻第3・4号, 東北大学文学会, pp.232-215
- 藤城浩子(2007)「「ノデハナイカ」類の意味・機能」『日本語学文学』18号, 三重大学日本語学文学会, pp.15-30
- 松井(山森)良枝(1996)「否定疑問文と解釈の多様性」『言語研究の領域—小泉保博士古稀記念論文集—』大学書林, pp.487-503
- 宮崎和人(2001)「認識的モダリティとしての<疑い>—「ダロウカ」と「ノデハナイカ」—」『国語学』第52巻3号, 国語学会, pp.15-29
- 宮崎和人(2004)「否定疑問文の類型について」『岡山大学言語学論叢』岡山大学言語学研究会, pp.1-15
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃(2002)『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版